

ボルノーの解釈学的認識論の考察

——認識の発展とその教育的意義について——

中 野 優 子

Erwägungen zur hermeneutischen Erkenntnislehre Bollnows

——über die Entwicklung von Erkenntnis und ihre pädagogische Bedeutung——

NAKANO Yuko

序 論

我々は対象を如何にして認識するのか。我々は対象をあるがままに認識しているのか。認識の発展と人間としての成長とは、如何に関連しているのか。人間としての成長という事に関して更に述べるならば、人間の知性と徳性とは如何に関連しているのか。これらは、いずれも教育にとって重要な関わりを持つ哲学的な根本問題である。ボルノー (O. F. Bollnow 1903—) の解釈学的認識論は、具体的に認識は如何にして発展するかを述べたものであるが、その中で以上の問題に新しい展望を与えてくれるように思われる。そこで小論では、ボルノーの認識論をたどりつつ、これらの問題について考察を試みたい。

考察の順序としては、先ず第一章でボルノーの認識論の持つ新しい意義を明確にし、次に第二章で、この認識論に於いて人間の認識の発展過程が、人間の全体としての生の発展と不可分に結び付いている事を示す。従来の認識論に於いては、認識の問題は知性の問題として、純粋にそれ自身の内で基礎づけられるものと考えられていた。しかしボルノーは、我々の認識が、意志や感情をも含めた人間の生の全体性の中で初めてその位置づけを得る事を明示する。ボルノーの解釈学的認識論によって最後に到達される結論としての、人間のあるべき認識態度は、人間が人間として成熟 (reifen) し、もはや自己に囚われなくなるところまで到達する事と不可分である。そういう境地に導く認識の態度を、ボルノーは「開いた前理解」¹⁾ (offenes Vorverständnis) と名付ける。「開いた前理解」という場合の「開いた」とは、あらゆる既存のあり方から解放されて自由である事を意味している。それに対して、「前理解」とは、予め存在しつつ我々の理解を導くものの事であり、それ故、我々の理解の仕方を予め限定するものを意味している。従って「開いた前理解」とは、互いに矛盾する方向性を内に持った概念である。つまり、限定するもの、拘束するものが、自由でもなければならぬ事を示す。そこで第三章に於いては、「開いた前理解」の持つ矛盾の問題と、それに関連して考えねばならない事柄について述べ、最後に第四章に於いて、人間の成熟化の過程でもあるところの認識の発展、及びその結論である「開いた前理解」の問題を、特にそれが子供の教育の問題としてどのような意味を持つかという事に焦点をあてつつ考えてみたい。

第1章 解釈学的認識論の持つ新しい意義

そこで、我々は先ず、ボルノーの言う解釈学的認識論とは如何なる立場であるか、従来の認識論との比較に於けるその新しさは何処にあるのか、という問いから始めよう。解釈学的認識論という言葉が既に示しているように、これは解釈学という立場の認識論への応用である。周知の如く、解釈学を文献解釈という狭い学問領域から解き放って、広く精神諸科学の方法として確立したのはディルタイ (W. Dilthey) である。ボルノーによれば、ディルタイはその生の哲学に於いて、本来生と世界とは始めから互いに非分離の統一をなしており、生の経過の中で初めて両者は二つの対立した側面として分離してくる、という考え方をしている³⁾。これを認識論的に言えば、人間は既に比較的幼い頃から生と世界に対する漠然とした理解を持っており、この漠然とした全体的理解から出発して、個々の部分を次第に正確に規定してゆく事によって認識が発展する、という事になる。ボルノーは解釈学的認識論の持つ特性を、「アルキメデスの点の不可能性の原理」という言葉で表現している³⁾。即ち、認識には、そこから始めて一步一步進む事によって確実な知識の体系を構成する事ができるような、究極の確実な出発点は存在しないという事である。ボルノーは、従来の古典的認識論は「アルキメデスの点」を問うところに特徴があったと述べるが、解釈学的認識論の持つ新しい意義は先ず、「アルキメデスの点」が不可能である事を明示しようとしたところに表明されている。即ち、我々はいつも既に、意識すると否に関わりなく、世界とその中の事物を何らかの意味で理解しており、すべての知覚、意識的な認識活動は、このような理解 (前理解) によって導かれているのである。そして新しいものの認識も、この予め持っている前理解への修正を通して可能となる。

ボルノーは、「我々は対象をあるがままに認識しているのか」という問いと関連して、カント (I. Kant) の直観の問題を取り上げている。カントによれば、すべての認識は直観に於いて始まる⁴⁾。しかし、ボルノーは、認識の発端に存在すべきである単なる質料であるカントの直観は、実は存在していない事を述べる。何故なら、我々は、いつも理解されている世界 (verstandene Welt) の中に住んでおり、そして、この世界の内では、すべてのものが常に前理解に基づいて一定の解釈を与えられているからである。それ故、前理解の方が先にあって、そこから我々は対象を見るのであって、対象そのものをあるがままに直観しているわけではない。我々は、気付いた時には既に一定の歴史的文化的社会的状況の中で生活しており、この状況に対する何らかの前理解を持っているのである。我々は、一定の文化の中で、その文化の風俗習慣によって見たり聞いたりする事になれ親しみつつ育つ。その文化がいつとはなしに染み込んで、一定の範囲の前理解が形成されている。そうなるのは、所属する社会の一員として、他の人々と共同して生きる為の共通理解を持つ為には当然の事であり、又必要な事だからである。

又ボルノーは生の哲学の立場から、認識活動それ自体だけを取り出して問題とはせずに、むしろ包括的な生の関連 (Lebensbezug) の中で成立し、この関連によって基礎づけられるものとしての認識活動を問題とする。我々の具体的な認識は、本来決して感情や意志を排除して成立するものではなく、常に何らかの気分や意志によってある程度方向づけられているのである。ボルノーは、この事がディルタイによって明るみに出された事を指摘している⁵⁾。これは、人間が、今、ここに於けるこの生の発展を絶えず求めているという事に結び付いてくる。即ち、人間は、一

般的抽象的な生ではなく、この特殊な自己の生、例えば物理学者としての生、実業家としての生の発展を求めつつ、認識し行為しているのである。ボルノーの認識論は、我々の日常的な生に於ける理解されている世界から出発して、認識の発展の過程を探ろうとするものであるが、そこには、認識の本質と機能を人間の生の全体連関に於いて把握すると共に、この事によって逆に人間存在そのものをより深く理解しよう、という人間学的な意図がある。

第2章 意識的な認識活動の成立過程について

我々は前章に於いて、我々の具体的な認識が、常に前理解によって導かれている事を考察した。この前理解によって予め与えられた理解されている世界の中で、人間は絶えず自己の生の発展という一貫した目的の下に、各人の個性に基づく特殊な志向性を持ちつつ認識し、行動している。こうして絶えざる生の発展を求めての活動の中で、人間の知、情、意は統一をなしている。即ち知、情、意は、人間の生の発展という大目的に向かって統合されている。こうした知、情、意が統一をなす状態は、ディルタイによれば「生の底層」である⁶⁾。ディルタイはこれを又、そこから様々に分化した作用、即ち知、情、意の作用が生じる恒常的底層とも呼んでいる。こうして知、情、意が統一している状態の中では、主観と客観との意識的な分離はまだ生じていない。勿論そこでも我々は様々な認識活動を行なっているのだが、この活動は特に意識にはのぼってこないものである。我々は特に自覚しなくとも、絶えず様々な情況の中で認識活動を行なっているのである。そこでは、知覚が外から入ってくるものを捉え、これが前理解の内で吟味される。知覚の捉えたものが前理解の枠の中に完全に包摂される場合には、知覚はその任務を果たした事になるので直ちに消滅し、この認識過程は特に記憶にとどまらずに終わってしまう。ボルノーは、日常使う自然な言語では、知覚する *wahrnehmen* とは、注視する、顧慮するという意味の *wahren* と関係がある事に注目している。従って知覚するとは、人間が彼の生の関連の中で、何か今まで気付かなかったある変化に突然気付く事の意味している。先ず最初に、これまででなれ親しんでいた環境世界の中に、ある変化が生じてくる事が知覚の契機である。次に、この変化に対して意識的に努力しつつ注目する事によって知覚は始まる。最後に、変化へのこの注目は、更にその変化に応じる行動へと人間を導き、彼のこれまでの行動に修正を加えさせるのである。そこでボルノーは、「知覚の警告機能」という表現を用いる。知覚は、その警告によって人間が彼の行動を変化に応じるように修正した時には、既にその機能を果たした事になる。知覚作用はその時消滅する。従って知覚は、認識の対象の持続的な観察の働きではない。知覚は、特定の個々の瞬間と結び付いた警告にとどまるのである。

しかし、知覚の捉えたものが前理解の枠を越え出る場合もありうる。この時初めて、本来の意味での主客の分離が成立する。ここで認識の対象は、認識する主体からは明確に区別されて、我々から持続的な注意と観察を要求する。前理解の構成そのものを変化させるような意味での新しいものを認識する働きは、知覚ではなくて注視 (*Sich-Ansehen*) と呼ばれる⁷⁾。注視によって持続的かつ詳細な観察を行ない、これまでの理解の枠にはどの部分がどのように入らないのかを知ろうとする。即ち、「知覚が一つの受身作用であるのに対して、…注視は明らかに自分の活動である。」⁸⁾ 注視に於いて人間は自ら主体的、意識的に対象に関わる。ボルノーはこの注視の働きに於いて、いわゆる認識の対象としての客観が成立すると述べている。「習慣的行動の攪乱、ある

いは露わとなった不確実性によって、それまでは自明のものとして生活してきたものがはっきりと対象化させられる…。生の関連は解消して、認識の関連に転じる。』⁹⁾しかし、こうした主観客観の分離の状態は、いつまでも存続するものではない。それは、人間が彼の前理解の枠を越えるこの対象を包摂する事ができるようになるまで、自ら前理解を修正し拡大させる事によって、再び解消される。

ところで、意識的な認識活動はそもそも何故生じてくるのだろうか。人間は自己の生の発展を目差しつつ、個々の特殊な目的を持って行動している。その際、その行動に対して、何かこれまでの理解の仕方及びそれに伴う行動様式によっては処理しえない障害、妨害となるものが立ち現われてきた時に、この障害を取り除こうとする意図の下に意識的な認識活動、主客の分離が起こると考えられる¹⁰⁾。そこでは、あるがままの存在としての対象の全体が認識されるのではなく、部分的な認識にとどまりがちである。即ち、人間のその都度の固有な目的の遂行の妨げになる部分だけを対象から見取り、妨げにならない部分は見過ごす傾向がある。言いかえれば、そこでは自己の固有な目的に従って、対象のどの部分を認識し又は見過ごすかという事についての取捨選択が、無意識の内に結果として入り込んでいると考えられる。そしてここに、認識の発展と関連して、単なる前理解ではなく、「開いた」前理解が問題となる所以がある。

第3章 認識の発展と直観への回帰

我々は前章に於いて、意識的な認識活動が如何にして成立するかについて考察したわけであるから、ここでは、それを更に認識の発展の問題と結び付けて考えてみよう。認識の発展とは、予め与えられている我々の前理解が、変化し拡大する事を意味する。知覚と注視がその契機となる事を、我々は前章に於いて考察した。しかし、そこで考察した事は、感性的世界、手仕事の技術的世界という、人間の生の限られた領域に於ける認識活動である¹¹⁾。認識活動の領域が精神的文化的世界にまで広がる時、ボルノーは経験 (Erfahrung) という概念を使用する。では、ボルノーの言う経験とは、如何なるものであろうか。経験も、認識の発展の契機となるものである限り、知覚や注視と基本的に異なる構造を持つわけではない。経験は、「期待が欺かれ、途上に予期しない妨害が出現する」¹²⁾ところに生じてくる。経験の場合も、経験される対象からの抵抗や妨害があって初めて、経験として成立しうる。それ故、経験は決して主観的なものではない。経験される対象の期待を破る厳しさ、その抵抗感によって、我々がここで一つの客観的な事実としての対象に関わっているのだという事が確かめられる。しかし、個々の期待を欺く出来事に出会う事によって、すぐに経験が成立するわけではない。それらの出来事の持つ意味を、人間が彼の前理解の中で位置づけ、そこからもう一度前理解の全体を見直す事が必要である。そうした過程を通して、我々は、我々の前理解を真に自己のものとして獲得してゆくのである。最初我々が持っている、世界への漠然とした全体的理解 (前理解) は、まだそのままで一般的な抽象的である。それを具体化し、充実させて真に自己のものとして獲得させるのは、経験の働きである。経験は、「一般的理解の中に前もって示されている可能性を実現し、それを具体的データで満たし、漠然とそこで前もって示されていたものを、明瞭な規定に持ち込む。』¹³⁾しかし、経験は、唯単に既存の前理解を満たすだけではない。我々は又経験に於いて、「親しみなれている世界へ侵入してくるある新しいもの」¹⁴⁾に出会う。そして、その事によって、我々の前理解自体が変化させられる

のである。そこでボルノーは、我々が経験する対象について、相対的に新しいものと絶対的に新しいものという区別をしている。相対的に新しいものとは、これまでの前理解の枠の中に、「単に新しいデータ」¹⁵⁾としてはめ込まれるものの事である。それに対して絶対的に新しいものとは、「これまでの認識の視界には属させられないで、むしろそれを全く飛び越えており、根本的に新しい自覚へと駆り立てる」¹⁶⁾ものである。それは、我々の予め持っていた前理解の枠内の論理では捉えきれないものであるが、現実にと出会う中で、その確かな実在感を持って我々に前理解の修正を迫るものである。例えば、天動説を信奉していた人々にとって、コペルニクスの説は絶対的に新しいものであったと思われる。絶対的に新しいものを経験する事によって初めて、我々の前理解の枠は拡張されるのである。このように、経験によって絶えず充実され、拡張される前理解の事を、ボルノーは「開いた前理解」と呼んでいる。「開いた前理解」とは、これまでの前理解によっては捉えられない新しいものに出会った時に、自己の前理解を修正する事によって、この新しいものをも認識できるようになるまで前理解を拡大させる事、こうした態度を常に保ち続ける事を意味している。そして、前理解が拡大される事によって、人間は更に広い経験へと進んでゆくのである。こうして、前理解と経験とは相関関係にある。前理解が広がる事によって、人間の活動領域も広がり、彼が新しい経験に出会う可能性もより大きくなる。そして、新しい経験に出会う事によって、彼の前理解は更に又拡大される可能性を持つわけである。こうして、「開いた前理解」は、時間の流れの中で、歴史の中で、常に生と世界に対するより豊かな理解へと自己を拡大させてゆく態度を意味している。しかし、このような態度は、すべての人にとって可能なものなのだろうか。例えば、同じ条件の下では誰もが同じ経験をするかということ、そうではない。そこで、経験が成立する為には、「常に目覚めた受け入れ態勢」¹⁷⁾がなくてはならない。経験をjする人間は、自己の持つ前理解に固執する事なく、新しい経験の対象に対して、常に開かれていなければならない。それは、彼が、事物が自らを開示するように、そのままに開示させる能力をjえていなければならない事を意味する。そこに、序論で触れた、前理解の内包する矛盾の問題が生じてくる。

既に述べたように、前理解は、それを基盤として新しい認識が始まるところの、認識にとって絶対必要な出発点であった。しかし、その反面、前理解がある為jにそれがかえって先入観となり、対象をあるがままに捉える事を妨げる傾向があるという矛盾が生じてくる。又この矛盾と関連して、別の方向から考えてみなければならない矛盾の問題が生じてくる。我々は既に、人間は、前理解によって与えられた理解されている世界の中で、知、情、意が一体となって、それぞれの個性に基づく生の発展を目差しての活動が続けている事を考察した。そこで、活動を支えている生の発展への意志が強ければ強いほど、人間は、ただ消極的に外界からくる経験の機会を待つのみではなくて、自ら積極的に新しい経験を求めて外界に関わってゆく事になる。この生の発展への意志は、強いほどよいという事になる。しかしその反面、生の発展への意志が強い為jに、自己の関わる対象の全体性を見過ごして、自らの特性に基づく生の発展の方向にとって必要な部分のみを見てしまう傾向があるという矛盾がある。

では、今述べた前理解と認識の発展をめぐる二つの矛盾の解決は、何処に求めたらよいのだろうか。ボルノーの言う「経験」が、その解決の道を指示しているはずである。さて、感性的世界、あるいは手仕事の技術的世界では、実験や観察等によって、すぐに認識の妥当性が論証され易い。

従って、前理解の枠から解放されて認識を広げる事も容易である。しかし、意味や価値を含んだ精神的・文化的世界では、認識の妥当性を論証する事がしばしば困難である。それ故、前理解の枠を破る事が、単に認識の問題にとどまらなくなる。前理解と対象とをつき合わす主体の問題と関係してくる。ボルノーの認識論の独自性は、実はこのような人間の主体的な問題を、認識の根底に於いて同時に考えてゆこうとするところにある。ボルノーによれば、「もはや正しい認識の技術が問題なのではなく、認識からする人間的現存在の自己照明が問題なのである。」¹⁸⁾以前に述べたように、我々の認識の発展は、外から立ち向かってくる新しいものによって、我々の現在の世界に対する理解の仕方（前理解）が否定を受ける事から始まった。ボルノーは、精神的世界に於ける認識の発展は、経験の苦痛性¹⁹⁾を通して成し遂げられる、と述べている。この苦痛性とは、外からくるものによって我々の前理解が否定され、これを修正する事へと強いられる事から生じるものである。特に、経験の世界に於ける前理解の広さ深さは、単に知のみの問題に限らない。それは、自己の生の発展の欲求が、自己に必要な部分のみを見て、あるがままの対象の真実の全体の姿を見過ごしてしまう傾向性がある事と関連している。自己の自然のままの行為が、結果として前理解を偏りのあるものとしている。こうした前理解の広さ深さの不十分さが、前理解の拡大と深化を迫る場面に当面する事によって、我々に苦痛として感じられるのである。この苦痛を伴う経験を通じて我々の前理解は発展するのであるが、必ずしも経験は最後まで遂行されるとは限らない。何故なら、我々は、経験の苦しさには耐え得ずに、経験の中に含まれている課題、我々の前理解を修正し発展させる事によって、この新しいものを受け入れる事ができるようにならねばならないという課題から、逃亡する可能性を常に持つからである。そして、この新しいものを強引に自己のこれまでの前理解の枠の中に閉じこめて、枠を越えるものまでを枠の中で処理してしまうという事が起こりうる。しかし、この場合には勿論認識の発展は生じない。この事は、認識の発展が、単に外からくるこれまでの前理解に対する否定という契機のみでは成立しえない事を意味している。それ故認識の発展は、外からくる否定を曲げる事なく、あるがままに受け入れて耐えぬくと共に、内からのその否定に対して自己の前理解を検討し、修正するという主体的な働きが呼応した時に、初めて成立すると考えられる。外からの否定の最も顕著な形を、ボルノーは危機と呼んでいる²⁰⁾。真の「開いた前理解」とは、このような外からの危機とも言える非常に大きな否定に対しても、常に自己を開いてその衝撃に耐えぬく態度を意味する。このような態度は、単に知性によってのみ可能となるのではなく、知、情、意のすべてを含めた人間の全人格的な力によって初めて可能となるものであり、しかもそうした力の所有は、人間の不断の克己の努力と不可分であろう。その意味でボルノーは、「あらゆる真正の認識は直ちに我々自身に関わるのであり、真正の認識は常に同時に自己認識」²¹⁾であると言い、「開いた前理解」という人間の開放的な態度が、「労苦して獲得されねばならない一つの徳である」²²⁾と言うのである。

認識の発展と「開いた前理解」に対するこのようなボルノーの見解は、直ちに「直観」(Anschauung)に対する新たな解釈に我々を導く。ボルノーによれば、これまで認識の発端に存在しなかったと考えられていた直観は、自己が自己自身に囚われる事から全く解放されて自由になった時に、対象を自己とは全く別の独立の存在としてあるがままに受け入れるようになった時に、初めて得られるのである。言葉をかえて言えば、直観は、我々が自己の生の目標を忘れ、それから解放された瞬間に生じる。ボルノーは、直観は、「実践のすべての要求から自由な観想

(Schauen)』²³⁾であると言う。直観は、個々の実践的目的、即ち対象に対して我々の生の側から持つ諸要求の束縛から自由になって、我々が対象に対して自己を開く時、即ち「人間が慣れ切った日常世界から身をそむけて、ひたすら直観された対象へと身を捧げる」²⁴⁾時に得られる。人間が「日常生活の多忙さから退き」²⁵⁾、「自由にかつ何ものにも囚われずに事物に身をゆだねて、事物から何ものを也得ようとししない」²⁶⁾時、対象は、人間の様々な意図や欲求によって操作される以前の根源的純粋性に於いて与えられる。我々はそこで、対象の根源の本質に触れる事ができる。それが、直観の本質的なあり方である。ただ、その際ボルノーは、「人間は、直線的な進歩によってではなくて、本質的な根源として把握された彼の発端へと絶えず回帰する事によってのみ、自己の最も深みにある本質を実現する」²⁷⁾と言う。我々は、囚われのない直観から対象を捉えるのではなくて、ある特定の前理解、特定の目的から対象を見てしまうのであった。それ故、日常的な我々のあり方をそのまま直線的に進めていっても真の直観は得られないのであって、我々は、直観へと努力して立ち帰らなければならない。即ち、あるがままの対象の存在に触れる為には、ある限定された前理解や自己の目的から対象を見るというあり方から解放されて、自由になる事が必要なのである。逆に言えば、我々は真の直観へ帰る事によって、自己への囚われから自由になり、対象の存在全体の持つ生き生きとした豊かさに対して開かれるのである。人間の生の真実の発展即ち成熟は、「純粋直観に身をゆだねる事によって」²⁸⁾、「人間自身も又自己の本質の根源へと回帰し」²⁹⁾、「最内奥の本質に於いて変化する」³⁰⁾ようになる事である。それは、人間が自己自身から自由になる事を示している。人間が自己の前理解から、又自己が所属する社会の前理解から、そして最後には自己自身から解放されて自由になる、即ち成熟する時、そこに真の直観が成立する。それ故ボルノーは、この根源への回帰の運動としての直観は、単に認識にとって必要であるのみならず、「直接に人間の全体に関わる問題」³¹⁾であると言う。「ここから、認識問題はその究極的な意味で倫理的な問題となる。そして、まさに直観はこの両者が直接に関わりあう場所を示す。」³²⁾こうして、認識の問題と人間の根本的なあり方としての倫理の問題とは、その根底に於いてつながっていると考えねばならない。即ち、これら両者が関わりあう場所としての直観に於いて、我々は前理解を持ちつつも、又自己の生の特殊な目的を持ちつつも、それらから自由になって対象を見る事ができるのである。「開いた前理解」という人間の根本態度が成り立つ究極の基盤には、このような意味での人間の直観する働きが存在すると考えられるのである。

第4章 解釈学的な教授法の可能性

これまで我々は、解釈学的認識論の立場に於いて、人間の認識と人間の成熟の連関を考察してきたのであるが、ここでは、それが特に子供の教育にとってどういう意味を持つかという視点から考えてみよう。先ず解釈学的認識論からは、教育に対して、特に子供に知識や世界の理解を媒介するところの教授法に対して、示唆に富んだ貢献が為されると考えられる。ボルノーはこの貢献を、教授法に対する解釈学的認識論の適用、つまり「解釈学的な教授法」³³⁾の可能性の中に見ようとしている。では、解釈学的に教授法を見た場合、どのような事が言われうるのだろうか。解釈学的認識論に於いては、我々の認識は、常に世界に対するある一定の前理解から出発するのであった。これは、子供が一定の歴史的文化的な条件を持った社会の中に生まれてき、それらについて意識する以前に、既にそれらと交渉しつつ育ってゆくという事と結び付いている。この事

は、人間が文化的社会的な存在である以上、その一定の文化、社会の中で生きてゆく為に必要な事である。こうして、学校にくる時には、子供は、既に生と世界に対するかなり広い知識や先入見を持っているわけである。教授法は、こうした前提の上に構築されねばならない。

その際、教授法には二つの異なった方向が考えられる。ボルノーは、その一つの方向を「教授としての授業」と呼んでいる³⁴⁾。子供は、成長して社会生活を営む為には、その成長の過程に於いて、ますます多くの新しい知識や技能を習得しなければならない。授業は、それら子供に媒介する役割を果たす。この時の授業は、明らかに一方的に前進する性格を持つ。それは、簡単なものから複雑なものへと、より正確な概念の獲得を目差して、体系的に前進する過程である。従来教授法の対象となってきたのは、この「教授としての授業」であった。しかし、それと同時に、全く反対に始源に向かって遡る方向の教授法が考えられる。これが、ボルノーの言う解釈学的な教授法である。そこでは、「言葉から直観へ」遡る事が目差される。先に、子供は系統的学習を始める以前に、既に彼の育った社会や文化について、かなり広い知識を持っている事を述べた。しかし、子供は、それらの知識を、一つ一つ自ら経験する事によって、自覚的に獲得していったわけではない。子供は先ず、多くの知識を、その根源に帰って自分で確かめる事なしに、言葉を通じて得る。この場合、「言葉を通じて」とは、子供が知識を、それについての生き生きとした直観や経験を持つ事なしに、外から伝えられるままに受け入れる事を意味する。しかも、言葉を通じて獲得された知識は、その知識の対象に対する一つの力となる。即ち、子供は彼の知識によって、その対象を自己の目的に応じて使用する事ができるようになる。しかし、その時子供は、事物のある特定の「利用価値の有無から」³⁵⁾ながめている。自己の目的にとって有益であるかどうかという観点から、ながめている。自己とは独立に、対象がそのものとして如何にあるかを純粋に見る働きである直観は、そこには存在しない。従って子供は、彼が既に持っている多くの知識を、自らの直観に引き戻して受け取り直す必要がある。その時知識は、主体的に獲得され、しかも対象のあるがままの存在全体の豊かさに対して開かれた、真の知識となる。ペスタロッツィ (J. H. Pestalozzi) 以来、「直観から概念へ」というのが教授法の一つの根本原則であった。ボルノーによれば、ペスタロッツィは、すべての確実に基礎づけられた知識の根底には、生き生きとした直観や体験が存在すると考えていた³⁶⁾。しかし、我々は、子供も最初からその社会の「前理解」の中で生活している事を思う時、先ず「言葉から直観へ」という逆の道をたどらねばならない事を知らされるのである。

では、解釈学的な教授法の言う「言葉から直観へ」と帰る事は、如何にして可能なのだろうか。子供は、所属する文化の中で育ってゆく内に、「常に一緒に持ち込まれる立場、一緒に持ち込まれる理論の呪縛の下に事物を見る」³⁷⁾ようになる。その文化の中で言葉を通して組織的に教育を受ける事は、従って、何ものにも囚われずに純粋に自己の内から物を見たり聞いたりする状態とは逆の方向である。だからと言って、言葉による教授をやめて、子供にただ物を見せさえすれば、子供はその本質を直観するわけではない。子供も又、彼の前理解に従いつつ物を見ているからである。ただ、子供は、大人と比べると、「まだ習慣性の中にあまりはまり込んでいないので、大人よりはまだ大きな希望の余地がある」³⁸⁾何故なら、子供は、無邪気さや無心の信頼というような、子供特有の「能力」あるいは「徳」を持っているからである。子供は、健全な環境の中でよく育てられたならば、両親を始めとして、彼を取り巻き、保護してくれる世界への素朴な「信

頼」を持っている。彼にとっては、世界は、意味を持った、そこで自分が安心して生きる事ができるような、「被包感」(Geborgenheit) を与えてくれる場所である³⁹⁾。これは一方では、子供が、彼の育つ社会、文化の中でのものの見方に、無抵抗に急速に染まってしまう事を意味する。しかし、それと同時にこれは、子供が、大人のようにまだ自我に固執する事がなく、無邪気な信頼という形で、いつも世界に対して開かれている事を意味する。子供には、大人のように自己を守ろうとする姿勢がない。それ故、子供にとっては、彼が既に持っている前理解や自己の欲求から解放されて直観に帰る事は、大人に於けるほど困難な事ではないのである。従って我々には、教授法的な努力によって、子供を直観へと連れ戻す事が可能になる。それは、「授業の技術」⁴⁰⁾によって、子供に「前進をせき立てるのを先ず一度中止して、抑え、驚きながら、くりかえし驚きながら、世界の豊かさを発見する為に世界を注視」⁴¹⁾させるようにする事である。その為の一つの方法として、ボルノーは、子供に対象を「指示する」こと (Zeigen) を挙げている。特定の対象を「指示する」ことは、子供に、日常の営みの中での物との習慣的な関わりを中断させる事を意図している。教育者が人差し指を上げるという簡単な動作は、「この特定の場所にある対象を取り出して、環境の中に融け込ませている日常の関係から解放し、その特定のものとしての対象を、観察の対象」⁴²⁾とさせるのである。そこに、直観が生じる可能性が開けてくる。例えば、ボルノーは、ペスタロッチが「壁の目立たない穴からながめさす為に子供たちを止めて、このつまらぬ単なる穴からどれほど豊富な形や色の種類が数え上げられるかを発見させた」⁴³⁾事を述べている。更にボルノーはもう一つの方法として、指示する動作からもう一步先に進んで、対象を可視的な姿に「表示」すること (Darstellung) を挙げている。これは、派生的な意味で、言語による表示も含んでいる。表示は、指示することと同様に、子供を「日常の営みから切り離して、直観の障害を除いてやる」⁴⁴⁾為に役立つ。表示は、子供に「あるがままの物を初めて見せてくれる。」⁴⁵⁾それは、子供が予め知っている事を再び示すのではなくて、逆に、表示を通して初めて、子供は、真に対象を見る事を学ぶのである。対象についての一つの模範的な表示を見る事によって、子供は、「それを現実の中に再び発見し、それによって世界が、子供たちに見透せるようになる。」⁴⁶⁾

こうして、「指示」や「表示」は、今まで気付かずに見過ごしてきた、世界の中の新しい富を、子供自身の眼によって発見させる契機となる。子供時代に、そういう直観体験、即ち、周囲に今までなかった新しい豊かな「世界が開ける」という発見の喜びと驚きの体験をする事は、人間の成長にとって非常に大切である。何故なら、このような直観体験の中にある二つの要素、即ち、自分にはまだ未知の「開かれた」世界があり、そして自己が無限に世界に対して開かれてゆく「可能性」を持つ、という自覚が、子供の中に、より大きな世界を目指して、未来に向かって積極的により出でてゆこうとする希望と意欲を作り出すからである。子供は、直観体験をする事によって、自己の持つ前理解の狭い殻を抜け出して、彼のこれまで知らなかった広い世界が、その限らない開けを持って彼に呼びかけている事に気付かされるのである。子供が直観へと導かれる時、「突然、世界はそこで、まだどんな人間の目的思考によっても汚されていない、最初の天地創造の日に於けるように存在するのである。」⁴⁷⁾そして、この開かれた「未来」を志向する意欲こそ、「成長」の原動力であり、「開いた前理解」の基底なのである。子供時代に直観体験をする事が大切であるのは、そのような体験をせずに、既に強固な認識の枠組みを作り上げてしまった後では、よほどの危機に会うか、よほどの感激を与えるものに会おうかしない限り、直観に帰る事は

稀にしか起こりえないからである。教育の究極目的としての人間の成熟は、彼が絶えず直観に帰る事によって、「その日常生活の無思考性」⁴⁸⁾から解放され、「真の生命に満ちた存在」⁴⁹⁾となる事、即ち、至るところに物事の新鮮な意味と価値を発見すると共に、自己の最内奥に何ものにも囚われない自由な自己を見出す事によって達成されるのである。子供時代に豊かな直観体験をする事は、成長して後も、真の直観の世界に戻る事をより容易にするであろう。解釈学的な教授法は、ボルノーも言うように、まだようやくその可能性が考究され始めた段階であって、それが如何なる形に発展してゆくかは、今後の問題である。しかし、少なくとも解釈学的な認識論の教育学に対する重要な貢献の一つは、「前理解」との関連に於いて、安易に子供の興味や要求を絶対視する事を戒めると共に、子供の認識の発展に於ける「指示」や「表示」の如き教育者の主導的な行為の意味を再認させ、子供の教育を大量の知識の注入と混同している今日の教育の風潮に反省を迫るものとしてまことに示唆的である事だと思われる。

註

- 1) O. F. Bollnow, Philosophie der Erkenntnis-das Vorverständnis und die Erfahrung des Neuen-, Kohlhammer, Stuttgart 1970, (以下 Ph. d. E. と記す) S. 118~119, 151~152参照
- 2) O. F. Bollnow, Dilthey, 3Auffl. Kohlhammer, Stuttgart 1967, S. 50~51参照
- 3) Ph. d. E., S. 12~23参照
- 4) I. Kant, Kritik der reinen Vernunft, B33及び Ph. d. E., S. 69~70参照
- 5) O. F. Bollnow, Dilthey, S. 55~57, 59~61参照
- 6) Ph. d. E., S. 32~33参照
- 7) ibid., S. 68参照
- 8) 9) ibid., S. 68
- 10) ibid., S. 66~68, S. 131 及び O. F. Bollnow, Das Doppelgesicht der Wahrheit, Kohlhammer, Stuttgart 1975, S. 27~28参照
- 11) Ph. d. E., S. 82~83参照
- 12) ibid., S. 131
- 13) 14) 15) 16) ibid., S. 145
- 17) ibid., S. 136
- 18) ibid., S. 29
- 19) ibid., S. 129~132参照
- 20) ibid., S. 98参照
- 21) ibid., S. 100
- 22) ibid., S. 137参照
- 23) 24) ibid., S. 71
- 25) 26) ibid., S. 72
- 27) 28) ibid., S. 74
- 29) ibid., S. 73
- 30) 31) 32) ibid., S. 74
- 33) O. F. ボルノー, 「哲学的教育学入門」浜田訳, 玉川大学出版部, 昭和48年, 55頁
- 34) 上掲訳書 67~71頁参照
- 35) 上掲訳書 72頁
- 36) 上掲訳書 40頁参照
- 37) Ph. d. E., S. 78
- 38) O. F. ボルノー, 「哲学的教育学入門」80頁

京 都 大 学 教 育 学 部 紀 要 XXVI

- 39) O. F. Bollnow, Neue Geborgenheit, 3Auf. Kohlhammer, Stuttgart 1972, S. 25~28, 及び O. F. ボル
ノー, 「教育を支えるもの」森, 岡田訳, 黎明書房, 昭和44年, 91~104頁参照
- 40) 41) O. F. ボルノー, 「哲学的教育学入門」81頁
- 42) 上掲訳書 84頁
- 43) 上掲訳書 81頁
- 44) 45) 上掲訳書 84頁
- 46) 上掲訳書 85頁
- 47) Ph. d. E., S. 73
- 48) 49) O. F. ボルノー, 「哲学的教育学入門」82頁

(本研究科博士課程)